

LP『ロックの王者! チャック・ベリーのすべて』(ビクター=64年発売)では、普通に「ロール・オーバー・ベートーベン」という片仮名表記だった。おそらくビートルズ・バージョンで広まった邦題と思われる。

1956年、4枚目のシングルとして発売され、R&Bチャートは2位、ポップ・チャートでも29位のヒット。ロックンロールに眉をひそめる良識派の大人のみなさんの神経を逆なでする題材で、それだけに快哉を叫んだティーンエイジャーたちの顔が目に浮かぶ。

少年時代、ブギ・ウギ・ピアノを練習したくて仕方なかったチャックの前に立ちはだかっていたのが、姉のルーシー。近所ではマリアン・アンダースン(黒人のクラシック歌手)と呼ばれるような才能の持ち主だった。彼女のクラシック・ピアノの練習は無条件で認められていて、チャックがブギ・ウギを弾くには、彼女の練習のわずかな隙を見つければならなかった。チャックの自伝によると、子供の頃、姉にピアノを独占されていた悔しさを歌ったとのことで、“巨匠ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンではなくルーシーに文句を言いたかったのだ”と語っている。無論、クラシック音楽をロックンロールとは対極の音楽として認識していたのは間違いなく、世の中の“権威”を代表する音楽として、ぶっ飛ばしてしまったのだが。

ちなみに、イントロは「ジョニー・B.グッド」に繋がるもので、同系統のものでは最初に登場した。また、バック全体のビートは跳ねているが、チャックがイーヴンの8ビート・ボトム・リフを弾いた、最初の曲という点でも重要な1曲と言えるだろう。

ちょっと手紙を書いて 送るよローカルDJ
ウキウキするやつ ジョッキーにかけてもらうぜ
ベートーヴェンはほっというて またアレ聞きたいね

熱気爆発 飛んじゃうジュークボックス・ヒューズ
ハートのリズムに ソウルが歌うブルース
ベートーヴェンをぶっ飛ばせ 言っとけチャイコフスキーに

ロックン肺炎には 一発リズム&ブルース注射
ローリン関節炎になったら
リズム・レヴューも座って見てなきや

ベートーヴェンをぶっ飛ばせ 2人ずつロックンじゃん

ほらいい気分なら 恋人連れて リール&ロックで ひっくり返し
持ち上げな もうちょい高く リール&ロック さあ、お互いに
ベートーヴェンをぶっ飛ばし 楽しみリズム&ブルース

朝も早くに ひとつ忠告 踏むなよブルー・スウェード・シューズ
ディドウル ディドウルとギターを弾いてりゃ
もう怖いものなく
ベートーヴェンをぶっ飛ばせ 言っとけチャイコフスキーに

ホタルみたいに体震わせ コマ並にくるくる回り
彼女の相手のダンスもぶっ飛び ちょいと 見ものな2人
彼女に小銭ありゃ 音楽 止むことな〜し

ロール・オーヴァー・ベートーヴェン~~~~
楽しみリズム&ブルース!

とにかく侮れないフレーズの連発である。2番の〈My heart's beatin' rhythm and my soul keeps singin' the blues〉は、縮めれば見事に〈rhythm and blues〉に。この曲から生まれた曲もあれば(別項参照)、“俺のブルー・スウェード・シューズ踏むなよ”と、ヒットしたばかりのカール・パーキンスの曲を引用したりもする。縮めの、“彼女が〈dime〉を持っている間は音楽が止むことなし”とは、コインをジューク・ボックスに入れ続けるからですね。わかるわあ。

さて、この曲でポイントなのが、〈Reel and rock〉という英語フレーズ。〈リール〉は釣竿の糸巻きからくる回るイメージだろうか? スコットランドの伝統的ダンスの一種でも、リールというのがある。リール・アンド・ロックという組み合わせは、かねてよりブルースで使われているものだ(例:From then on till Monday morning, the whole joints begin to reel and rock=それから月曜の朝まで、酒場中が大騒ぎに/ルーズヴェルト・サイクス「West Helena Blues」より)。ビッグ・ジョー・ターナーの曲からもヒントを得ているとのことだが、チャック自身もこのフレーズを発展させて、「リールン・アンド・ロックン」(P37を参照)を録音している。